

# 平和の礎

シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦Ⅲ



# 平和の礎

シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦

Ⅲ

## 平和の礎

シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦Ⅲ

平成五年三月三十日 印刷

平成五年三月三十日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三ノ十三  
発行 平和祈念事業特別基金  
印刷 新日本法規出版株式会社

## まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉しやの念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立された。

基金法には、この目的を達成するために行うべき各種の業務が定められているが、この「平和の礎——シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦——」の作成は、その中の関係者の労苦に関する調査研究並びに関係者の労苦に関し、出版物を作成し及び頒布する業務に係るものである。

この業務の実施に当たり、基金は、平成元年度から財団法人全国強制抑留者協会に、主として次の三つの観点から抑留体験者の手記の執筆あるいは聞き取り等の方法により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託した。

### (一) 労役の実態

### (二) 抑留者の統制管理の実態

### (三) 抑留中の生活と極限状態における意識

協会では、基金からの委託に基づき、全国的に広範囲にわたり活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「強制抑留者の労苦調査報告書」として基金に報告がなされた。

報告された労苦記録の各篇々には、多くの抑留者を酷寒凍土の荒野に不帰の客とさせたシベリアでの寒さと飢えと重労働を共通労苦とする過酷な抑留条件のもとで、強く生き抜いてきた方々の様々な労苦の実態が、簡

潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれている。

戦争の残酷さ、残酷さ、悲惨さ、その上いかに無意味なものか、翻えつて平和の尊さ大切さを心に深く印し、子々孫々に語り継いでいくためには体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録は、この上なく貴重なものであり、その労苦を徒労に終らさないためにも、永く保存され周知されるべきものと認められる。

基金は、今般協会から報告された平成三年度分の労苦調査記録を基金の設立目的に照らし、その成果を基金業務報告資料として取りまとめるとともに、本資料を永遠の平和の礎として出版物として頒布することにより、平和祈念事業の一層の理解と認識を深めることに資することとした。

調査に当たられた協会関係者のご努力と寄稿された多くの方々のご協力を感謝するとともに、本書が平和祈念の書として広く役立ちうるならばこれに越した喜びはない。

平成五年三月

平和祈念事業特別基金

理事長

藤井良二

シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦

Ⅲ

目次

まえがき

藤井 良二

同胞の鎮魂を念じ

原始林伐採の四年間

ソ連抑留の思い出

シベリア抑留体験記

エトロフからアムールへ

異国の丘シベリア抑留

無題

食いたい 寝たい 帰りたい

シベリア抑留で見た生地獄

シベリアにて

我が青春は

シベリア捕虜の地獄にいた

シベリア抑留体験記

シベリア抑留体験記

悲惨な抑留者の生活

キリエの寒さと飢えに闘って

シベリア抑留記

シベリア抑留記

悪夢のシベリア

## 〔手記〕

太平洋戦争とマガダン抑留記録

私の入ソ

私の捕虜体験記

シベリア抑留夜語り

抑留生活を振り返って

抑留の日々

ウラジオストク抑留四年

望郷の果てに

シベリア抑留労苦調査

ハバロフスクの思い出

私のシベリア抑留

『失われた青春』

ソ連抑留時代を思う

家族を失った抑留残酷記

シベリア抑留の思い出

抑留生活回顧

|       |    |
|-------|----|
| 長峰 泰夫 | 1  |
| 菊川 栄一 | 15 |
| 田中新治郎 | 17 |
| 青木 貞一 | 20 |
| 熊谷 精一 | 27 |
| 大谷 昭  | 32 |
| 風間 健次 | 35 |
| 村岡千代貴 | 37 |
| 久保田清蔵 | 42 |
| 総元 禄朗 | 46 |
| 田辺 壮久 | 48 |
| 室川 弘義 | 59 |
| 石川 朝雄 | 61 |
| 加藤新三郎 | 77 |
| 奈良 勝正 | 80 |

|       |     |
|-------|-----|
| 生越 昇  | 87  |
| 小柳 信人 | 90  |
| 千代川幸吉 | 92  |
| 阿部 光明 | 94  |
| 前川 武雄 | 100 |
| 島崎 武男 | 103 |
| 吉田 吉治 | 105 |
| 庄司 音松 | 109 |
| 松浦 虎市 | 114 |
| 新谷 俊男 | 118 |
| 川村 富弥 | 121 |
| 鈴木 重雄 | 124 |
| 長塚 力  | 129 |
| 周佐喜代止 | 131 |
| 小山 九藏 | 134 |
| 梶田 利男 | 136 |
| 八幡 義隆 | 139 |
| 折居 次郎 | 145 |

|                 |  |       |     |               |        |     |
|-----------------|--|-------|-----|---------------|--------|-----|
| シベリアの黒ダイヤ       |  | 坂本清次郎 | 154 | バム鉄道敷設        | 大水 操   | 236 |
| 齒をかんで、          |  | 村上 武士 | 157 | 日独共同の運動会      | 河原 三雄  | 238 |
| 母国の土を踏むまでは      |  |       |     | 祖国は遠かった       | 西野 津一  | 240 |
| れんが工場           |  | 小岩 敏夫 | 163 | 私の抑留前後        | 白鳥 侃児  | 244 |
| 我が青春のあの日あるとき    |  | 本宮 龍平 | 166 | 興安嶺からウラルを越えて  | 西 富一郎  | 249 |
| 私のソ連抑留体験        |  | 宮野 泰  | 176 | シベリア抑留への道程    | 森 肇    | 254 |
| シベリア抑留          |  | 田中 一司 | 180 | シベリア抑留記       | 若月太郎兵衛 | 257 |
| ソ連抑留体験記         |  | 林 順一  | 182 | 私の虜囚小説        | 岩崎 弘一  | 267 |
| 悪夢のシベリアを偲んで     |  | 吾郷 信夫 | 189 | シベリア挽歌        | 及川 新藏  | 271 |
| 第四十五収容所二か年の記    |  | 箱上 春市 | 192 | 無題            | 田口 幸安  | 274 |
| 中央アジアバルハシ鉞山     |  | 渡辺 健一 | 195 | 飢餓地獄          | 石橋喜治郎  | 281 |
| 苦闘粉塵吸入労働実記      |  |       |     | 厳寒の地で友との別れ    | 高橋 勝男  | 284 |
| 忘れ去ることのないシベリア抑留 |  | 高野 広一 | 212 | 無題            | 室橋 正一  | 286 |
| シベリア（外蒙）抑留の記    |  | 前澤 勇  | 216 | シベリア抑留体験記     | 菅原 春一  | 289 |
| シベリア抑留          |  | 山口 利一 | 220 | ナホトカの汀に立ちて    | 塚本 光雄  | 293 |
| 満州から強制抑留、そして帰国  |  | 中沢 仁作 | 223 |               |        |     |
| 何日再見望郷の想い       |  | 三上 巖  | 228 |               |        |     |
| 夜盲症             |  | 岩館 弘一 | 230 | [聞きとり調査]      |        |     |
| シベリア抑留生活から      |  | 岩渕 功  | 233 | 帰還後二年癒されぬ抑留飢餓 | 中島 忠治  | 297 |
|                 |  |       |     | 炭坑から警備兵宿舎へ    | 山形 満治  | 301 |

シベリア抑留記

凍原の虜囚

一人で働いた抑留生活

私に残る心のシベリア

石切り作業の一年余

炭坑に明け暮れた抑留の思い出

ある炭坑の思い出

シベリア抑留

シベリアの自分史

私のシベリア抑留記

抑留三年ナホトカで返される

餓鬼牢獄

シベリアの思い出

苦難のシル河工事

悲愁のラーゲル

生地獄のシベリア強制労働

一日十円の賃金で塩を

あとがき

|       |     |
|-------|-----|
| 丸山 義信 | 303 |
| 森田 廉  | 305 |
| 佐々木正志 | 309 |
| 葛西 保  | 312 |
| 井場 寿春 | 314 |
| 盛川 松雄 | 316 |
| 高橋 信男 | 319 |
| 田山 司郎 | 322 |
| 日沢幸太郎 | 325 |
| 北川 長吉 | 332 |
| 菅原 義三 | 335 |
| 服部酒造雄 | 345 |
| 中山 実雄 | 355 |
| 持田 一男 | 357 |
| 坪和 恵三 | 360 |
| 近藤 恒雄 | 365 |
| 中山 嘉明 | 368 |

# 手記

## 太平洋戦争とマガダン抑留記録

和歌山県 長峰泰夫

まえがき

昭和十九年三月、和歌山市にて三か月の教育召集の通知を受け、青森県弘前市第四七師団通信隊へ入隊する。昭和十九年五月、臨時召集となり、第七三旅団通信隊へ転属になる。北海道小樽市色内小学校にしばし滞在後、小樽港を出港して北千島へ向かう。このとき、通信隊の有線、無線の兵隊を指揮したのが主計伍長であった。

昭和十九年六月二十三日、北千島占守島へ上陸して

から、第九一師団第七三旅団通信隊無線中隊に所属していた。将校、下士官が来たのは後の便である。ひんぱんにアリューシャン列島から飛来するアメリカ軍の空爆を受けながら守備陣地を固めていた。しかし、四月ごろから逆に内地へ大砲、弾薬、ガソリン等を持ち帰っていた。戦況は無線機で傍受していた。外電の方が正しい気がしていた。

昭和二十年八月十五日、ここで終戦になり待機していた。昭和二十年八月十八日、ソ連軍が上陸し、日本軍と激烈な戦闘が行われ、我々も霧の中、百メートルの至近距離で対峙していた。終戦後であり、八月二十三日に方面軍の命令により休戦する。

昭和二十年十月十六日、占守島の戦場掃除を終わって集合した部隊から、四個大隊四千人がソ連貨物船に

乗せられて出港した。進路を北北西に進むこと二昼夜。前方に陸地が見えた。寒々とした山は頂上が石で覆われ、下の方に樹木が生えていて変わった風景であった。

船は岸壁に横づけになり停止した。十月十八日の午後二時過ぎであった。下船して五列に並んだが、一向に出発の気配がない。上陸したのは、第九一師団第七三旅団司令部所属の部隊、直接戦闘に参加した生存部隊、その隣接部隊、海軍第五一警備隊関係等で、対ソ戦の実施と指揮命令関係の部隊所属の下士官、兵に将校若干名で編成されていた。歩き出したのは一時間以上たってからだった。この日から丸四年、この地で抑留されるとは思ひもなかった。

マガダン地区の抑留に関しては、ほとんど知らされていなかった。ただ、占守島、マガダンを経て帰還した者のグループ内では、戦友会で資料・記録を配布していた。シベリア抑留も地区的に、一般と離れた極東のコリマ州（現マガダン州）、マガダン市周辺であったので、最近まで余り知られていなかった。マガダン市の北の奥地はタイガーといって、囚人の強制労働者

が大量に送り込まれる地で、当時ロシア人のほか、ドイツ、ポーランドの捕虜も送られてきていた。埋蔵資源の豊富な地帯だからである。

マガダンとは

マガダンはシベリアの極東にあり、北緯六十度、東経百五十二度の地点にある都市で、マガダン州（当時はコリマ州）の州都となっている。昭和二十年（一九四五）当時の人口は十万人といわれていた。

夏は日が長く白夜であるが、冬は逆に日が短く、暗い時間が長い。真夏は三十度を越す暑さになる。三か月の間に芽が出、花が咲き、果実が実るあわたたしい季節である。冬は長く、九月に氷結があり、厳冬では、晴れの日中でも零下十度くらいで、零下三十度〜五十度になることも珍しくない。五月に入って雪解けが始まる長い季節である。

マガダン港は冬に凍結するが、重要な港である。北極圏の各種金属の採鉱したものを輸送する中継基地となっている。冬は砕氷船が活躍し、航路を確保する。昔から囚人の流刑地として有名で、資源開発のために

強制労働をこの奥地にあるタイガーで、道路、建築、施設、資源の採掘、輸送を行っている。悪条件のため死亡する人が多く、もしここで生きて刑を終えても、この地で生涯を終わる人が少なくない。

都市公共施設等がそろっていて、州庁舎（四階建、日本人も建設に参加）、市庁、電話局、消防署、学校、病院、育児院（デートコンピナート）、銀行、博物館、文化館（ドーマクリトール：劇場、図書館等）、映画館（ゴリキノ、ダンスホールも中にある）、公園（落下傘塔もあった）、旅館一号、旅館二号（兵舎にしていた）、ドーマ十五号（日本人が三年かけて建築、美しさはマガダン一）、放送局（ラジオコンツェル）等。倉庫群、発電所、水道供給所、自動車工場、ガラス工場、ビール工場、れんが工場、木工工場、被服工場、パン工場、洗濯工場、化学工場等。

陸の孤島と言われるように、寒冷地であるから、食糧、資材はウラジオストック、ナホトカから二千七百キロの海上輸送に依存している。マガダンの奥は山岳地帯も多く、未開発の地帯が広がっているところであ

る。この奥地へ食糧、物資を送る重要な拠点となっている。

マガダン市は当時、日本人抑留者は市内に二千人、ここから八十七キロのところまで二千人が点在して、道路拡張工事、鉄道整備、伐採、炭鉱採掘、ガソリン配管工事をしていた。市内では、港湾、倉庫、建設、工場等、多くの職種で労働していた。

#### シベリアのマガダン抑留

昭和二十年十月十六日、占守島出港

北千島占守島の長崎から陸軍三千人、海軍千人、合計四千人がソ連貨物船に乗船する。船内は油臭く、むっとする暖かさで、板敷きの二段式寝台が並んでいて、そこに全員が詰め込まれる。出港した船は北北東へ進路を取り、白浪を切って進んだ。甲板には便所があり、臭いがきつく、長くいられなかったのも、ほとんど船内にいる。東京ダモイ（帰還）もなく、不安は隠せなかった。

昭和二十年十月十八日、マガダン港へ上陸

陸地が見えてきた。山の頂上が石だらけで、下の方

に木が見える殺風景なところではあるが、船は岸壁へ横づけになる。二隻の船が先に横づけになっていた。全員、荷物を背負い下船して、五列に並び整列する。人員の点呼だろう、ソ連兵が一生懸命数えている。一時間半かかりやっと歩き出した。だから坂を上がっていくが、時々停止しては歩き出す。ロシア人の男女、子供が口をもぐもぐさせて珍しそうに眺めていた。(松の実を食べていたため)

だんだん冷えてきたころ、大きな建物に着いた。中はほこりっぽく、天井に裸電球が数個ぶら下がっている。二段になった板敷きの寝台がある。ここに五大隊の千人が入れたが、寝台だけでは足らず、土間もいっぱいになり、荷物と一緒に座るのが精いっぱいであった。夕食の炊事が始まったが、水が足らず、砂が混ざった米しか炊けなかった。こんな生活を数日していると移動の命令がきた。

道路の拡張作業することになる。ポルト(港)を〇キロとし、奥地へ八十七キロまでの七メートル幅の道路の両側を一メートル拡張し、九メートル幅の道路

にするという作業である。道路を四区間に分けて、一中隊二百五十人ずつで一区間を担当することになる。ラーゲル(収容所)のある地点に一個中隊を配置していく。第一中隊：六十五キロ収容所、第二中隊：三十キロ収容所、第三中隊：三十九キロ収容所、第四中隊：十九キロ収容所と決定する。我々第四中隊は、井辺准尉以下二百五十人が十九キロのラーゲルへ行くことになる。

昭和二十年十月二十二日、十九キロ幕舎到着  
各大隊ごとにトラックに分乗して、それぞれの地点へ出発する。我々五大隊四中隊は、十九キロの道路標識の少し手前のところで下車する。新しい三棟の布製幕舎が建っている。ほかに炊事の棟がある。この季節になると日も短くなっていて、冷え込みも増しているように思える。それぞれ割り当てられた棟に入り、荷物を整理する。夜は持ってきた衣類を全部かけて横になるが、ぞくぞくして寝つかれない。うとうとしていくうちに朝がきた。

昭和二十年十月二十三日、十九キロ幕舎周辺整備作

業

幕舎は三棟と炊事棟、便所、少し離れて監督の家と兵隊の住居がある。幕舎は寒くて睡眠できないし、付属設備も整っていないので整備作業をすることになる。幕舎の保温は周りに丸太を積み上げ、布地との間に土とおが屑を詰め、屋根の部分に草を根こそぎとって、敷きつめて保温するというものだった。

#### ○丸太の切り出し運搬

各班が奥地へ雪を踏みながら入っていき、手ごろな落葉樹を切り倒してからひと休みのため、たき火を燃やし円陣をつくり、お国自慢の食べ物を披露し合って、ちようど昼ごろ幕舎へ帰り、午後もう一回、丸太を持ち帰って一日が終わる。兵士がついてくるが、言葉が通じないので会話もできず、たき火の周りを回ったりして体を持て余していた。

毎日毎日、この作業を繰り返す。木取りの距離も段々遠くなり、除雪をせずに雪の上に出た幹の下を切つて、休憩時間を確保するようになる。用具はラバータ（スコップ）、ピラー（鋸）、タポール（まさかり）の

三点セットであるが、アメリカ製の方がよく切れた。帰ると、手がかじかんで感覚が鈍くなるので、バケツにお湯を入れて手をつけて、手が痛いような、かゆいような感じを経て、手の感覚を回復するまでつける。

#### ○外壁の保温作業

別の班は、運ばれた丸太で柱を二本ずつ立てて、間に丸太を横に積み上げていく。幕舎の布と丸太の間に、土とおが屑を混ぜたものを詰めていく。詰める幅は平均五十センチで、下はこれより少し広く、上は狭くする。屋根には根つきのツンドラを敷く。ただし、ストープの煙突回りは空ける。ここまで終わるのに半月以上かかってしまった。

#### ○垣根づくり作業

幕舎の保温作業を終了して、今度は外回りに垣根をつくることになる。丸太の柱を立て、丸太の横木を渡して固定し、松の枝をさして幕舎と外部と隔離する。出入り口は一か所のみである。普通のラーゲル（収容所）は有刺鉄線の二重の囲いになっている。

#### ○望楼建て作業

兵士の歩哨が夜間警備のために登るもので、垣根の角に建てられる。四本の丸太を建て、上に望樓の床、屋根、腰回り板、はしごをつくって終わる。夜、兵士はシューバー（内に毛のあるオーバー）の膝下と靴の下より横に長いものと二枚着て立哨する。蒙古系の兵士が多かった。

#### ○炊事場の改修

日本人が炊事をやりやすいように改修する。

#### ○ロシア式便所

角材と板でつくった簡易式であるが、日本人から見ると驚きだった。三方は囲ってあるが、入口の扉は低く中が見える。敷き板には八個の丸い穴（直径二十五センチ）が等間隔に空いているだけである。用便には、二人目からは前の人のお尻を見ながら座ることになる。外には、次の人が並んで待っている。大はよいが、小ははみ出してできない。初めは大変抵抗感があつた。そのうちに諦めたが、後味は複雑だった。

#### ○代用湯たんぽ

ストープにあたるも顔が赤くなり、衣類はホカホカ

だが背中がぞくぞく寒いので、せんべい焼きのように前と後ろを交互に暖め寝るが、冷めるのが早かった。そこでだれがやり始めたか、手ごるな石をストープに針金でつるし暖めて、石を布に包み抱いて寝た。みんながまねするようになった。

何とか落ち着くのに約一か月かった。

昭和二十年十二月、十九キロ幕舎収容所 道路拡張

#### 作業

幕舎の整備作業が終わると、予定していた道路拡張の作業が始まった。当時のマガダンから発するコリマ街道は奥地タイガーへ通じる重要な道路である。タイガーへ、食糧、物資を常時輸送して、労働者の生活、資源開発を維持している。この道路は幅員七メートルであるが、この道路の両側を一メートル広げて、幅員九メートルの道路として、より安全性を高めようとするものである。

道路の舗装は土と小石のみでできている。路面は凍結で十分締め固まる。この道路はポルト（港）を○キロ口として、一メートルごとに道標が立っているが、今

回は八十七キロまでを四区に分けて、その一区を担当する。道路の奥地に向かつて右が道路より低い平地で、左が丘陵になっているので、左の丘陵の土を掘って両側へ埋め立てる作業である。丘陵の土は五、六十センチくらい永久凍土となっていて、これにローム（鉄棒）で穴を数本あけて、ダイナマイトを仕込み、爆破して柔らかい土を出し、運搬して埋め立てるのである。

用具は、ローム、ラパータ（スコップ）、カイロ（つるはし）、ターチカ（木製荷積用一輪車）、ターチカを通す板等である。別に発破用ダイナマイト、導火線等がある。

服装は戦闘帽、防寒帽を重ねてかぶる。防寒外套、毛普通外套、毛軍上衣、防寒シャツ、綿シャツ。毛ズボン、毛袴下、綿袴下、ふんどし、靴下二枚。ソ連製綿入り布防寒靴、防寒手袋と所持している全衣類を着装して重かった。防寒衣類、靴はたき火でよく焼けて補修に追われる。

朝、整列し、近ければ徒歩で、遠ければトラックで現場へ着く。まず、グループごとにたき火にあたり、

一息入れて作業にかかった。兵隊もついて来ていて、あちこち歩いているだけで退屈そうだった。開始当時は、ノルマについては全然認識がなかった。朝八時から夕方五時まで、昼食時間一時間休んで仕事をすればよいと思っていた。

まず、土を出さないといけないが、永久凍土となっていて、カイロ、ラパータでは歯が立たない。近くの盛り土のある場所を選んで、五人前後の班をつくり、発破かける位置を決める。ここへ各人がロームで一本ずつ穴を掘り、一―一・二メートルに達したら、ダイナマイトと導火線を入れ、土をかぶせて爆破して、柔らかい土の層を出して、その土をターチカに積んで道路の側面に埋めていくのである。

穴は場所により掘るのに難易があり、簡単にいかなかった。大体午前中に穴を掘り、午後に発破をかけてから土を運搬するのが一般の作業であった。従って、土は半日しか出せなかった。寒いから監督がいないと、たき火にあたり休憩するから、仕事ははかどらないので、正味の労働時間は短くなってしまふ。ロシア人の

監督は作業量が少ない、「ブローハ、ブローハ」（悪い、悪い）とばかりいっている。

それで、穴を早く掘り、土出しを早くするしかないと考えた。そこでロームの先を常に土を掘りやすいように、先端を平らに広げる加工を作業から帰ってすぐ行って、自分専用とし、寝台の下に保管する。この方法で掘る場合は、周りを崩しながら下へ掘るとスピードが上がった。しかし、石に突き当たったりすると、先端が丸くなり、現場で修理して使用した。また、ロームを修理した後、新しく別の穴を掘ることもあった。けれども、穴掘り、発破かけ、土掘り、運搬では、場所によりばらつきがあり、思うようにいかなかった。

土出し現場は、翌日のために帰りに袋をかけ、その上に土を撒いて、翌日は袋を持ち上げれば凍結が少なく、早く土出しができて能率が上がるが、別の場所へ行けば、また穴掘りからなので、一から作業となった。衣服をたくさん身に着けているから、動作が鈍いので進度が遅いのは仕方ない。食糧も、日本食がなくなりロシア食になり、カーシャ（おかゆ）では力も出なく

なってくる。なれない食事、作業、寒さで体力を消耗して、栄養失調者がじわじわふえていった。そのうち雪が降ってきて作業が除雪へ変わっていった。

昭和二十年十二月、十九キロ幕舎収容所、除雪作業除雪は、初めのうちは、六十センチ角のベニヤ板に柄をつけたスコップにて、雪を道路の両側に寄せ、土をたたいて円弧にし、風が吹いても吹きだまりにならぬようにうるさく指示される。道路に積もっても、マシーナー（自動車）がストップしないように除雪した。そのうち雪の量が多くなり、また風が吹くと、雪だまりができ始め、道路も厚く雪に覆われるほどになってきた。

こうなつては鉄製のラバータ（スコップ）で道路下へ雪を放り投げるようになる。マシーナを何が何でも通すという監督の態度であつた。聞くところによると、特にプランマシーナーという十五トントラックに三十トンの有蓋ワゴンを引くものは、日時を決めて走らせて、目的地へ着けないといけない。重要な車だから、絶対ストップさせるなという要請である。奥地では、